

人文社会科学部では、市民のみならずにもご参加いただける講演会をはじめ様々な活動を行っています。掲載している内容は多様な活動の一部です。興味を持った方はぜひ人文社会科学部ホームページをご覧ください。

山口教授が指導するOlga Pak助教授が Best Paper Prizeを受賞 (2017年9月6日)

山口昌樹教授(国際金融論)が指導するカザフスタン経営経済大学のOlga Pak助教授が学術誌Review of Integrative Business and Economics ResearchにおいてBest Paper Prizeを受賞しました。受賞論文のタイトルは“Business Drivers of Bank Stability in Kazakhstan”で、カザフスタンにおける銀行業の安定性を分析したものです。分析結果は、資産規模、貸出増加率、証券投資増加率の増加が銀行の金融的安定性を損ねていることを示し、さらに、短期資金調達が増加しているという従来の想定とは逆の事実を発見しました。こうした顕著な学術的貢献によってPak助教授が受賞するに至りました。

山口教授は日本学術振興会の論文博士号取得希望者に対する支援事業においてPak助教授の指導協力者になっています。Pak助教授が研究を進める予定論文題目はBank business models and financial stability in the Eurasian Economic Union's transition economiesで、ロシア、ベラルーシ、カザフスタンにおける銀行業のビジネスモデルと金融的安定性との関係の検証に取り組んでいます。今回の受賞論文については、昨年の8月に九州大学において、9月にカザフスタン経営経済大学において山口教授が指導を行いました。来年の3月には別の論文についての指導をカザフスタン経営経済大学において山口教授が指導する予定です。



論文にコメント中(九州大学にて)

『アンドレ・バザン研究』第1号刊行 (2017年5月16日)

人文社会科学部の付属機関である映像文化研究所内に発足した研究会「アンドレ・バザン研究」の会誌『アンドレ・バザン研究』第1号が創刊されました。

編集(共同)は、映画研究がご専門でもある、研究所副所長兼映画部門部門長の人間文化コース准教授の久保清朗先生です。

以下が、内容目次となります。

◎久保清朗「バザンの徴の下に——『アンドレ・バザン研究』創刊に寄せて」

[特集]作家主義再考

アレクサンドル・アストリュック「新しいアヴァンギャルドの誕生——カメラ万年筆」(堀潤之訳)

ロジェ・レーナルト「フォード打倒！ ワイラー万歳！」(堀潤之訳)

アンドレ・バザン「ジャック・ベッケル『エストラパード街』」(角井誠訳)

フランソワ・トリュフォー「アリババと作家主義」(久保清朗訳)

アンドレ・バザン「誰が映画の本当の作者か」(久保清朗・堀潤之訳)

アンドレ・バザン「作家主義について」(野崎徹訳)

アンドリュウ・サリス「作家理論についての覚え書き、一九六二年」(木下千花訳)



『アンドレ・バザン研究』第1号

坂井教授が外務大臣から表彰 されました (2017年7月12日)

平成29年7月6日、本学部の坂井正人教授が、ナスカの地上絵研究を通して、日本とペルーとの相互理解に寄与した功績が認められ、平成29年度外務大臣表彰に選ばれました。

表彰後、坂井教授からは、「これまで一緒に研究してきた同僚や学生たち、我々の研究を理解して、ご援助いただいた日本及びペルーの友人たち、そして山形大学及び地元企業のお陰だと感謝しております。今後一層、地上絵に関する学術研究及び保護・保存活動に邁進するつもりです。」とのコメントがありました。

また、7月12日には、坂井教授は、学部長とともに小山市長に表彰を報告し、学長からはお祝いとお励みの言葉がありました。



清塚学部長(左)、坂井教授(中央)、小山市長(右)

中島准教授が4年連続で ベストティーチャー賞を受賞 (2017年7月7日)

平成29年6月28日、本学部の中島准教授が平成29年度山形大学基盤共通教育ベストティーチャー賞を受賞しました。

この賞は、本学の基盤共通教育において多くの学生に支持され、質の高い授業を提供してきた優秀な教員に対し表彰される賞で、同人はこれまで、平成26、27、28年度の3年連続で受賞しており、今回の受賞により4回目の受賞です。

平成19年度にこの賞が創設されて以来、歴代最多受賞です。おめでとうございます！引き続き、質の高い授業を提供していただくことを期待しています。



4年連続受賞となる中島准教授

オープンキャンパス2017を開催しました。

2017年8月11日

平成29年8月11日(金)、本学小白川キャンパスにおいて、オープンキャンパス2017を開催しました。

今年、人文社会科学部となって初めての開催です。本学部での内容は、各コースによる「コース説明会」、7名の教員陣による様々な分野の「模擬講義」、教員や現役大学生と勉強やサークル、学生生活などについて直接話ができる「先生とのつどい・在学生とのつどい」、大学ならではの特殊教室を巡る「教室見学ツアー」、短期大学生等を対象とした「編入学説明会」を開催し、ご来場いただいた高校生や保護者の皆様に本学部の雰囲気を体験していただきました。

当日は、小雨模様でのスタートでしたが、2,000人弱の方にお越しいただき、今年も大盛況となりました。

皆様の進路選択の参考にしていただくと幸いです。たくさんのご来場、誠にありがとうございました。



人文社会科学部の
今を伝える

Agora

人文社会科学部ニュース<アゴラ>

“AGORA”とは、ギリシャ語で“広場”という意味です。

49巻2号
山形大学人文社会科学部
2017.12.28

ふぁんたすていっく!

写真で教員の研究を
楽しく紹介するコーナー

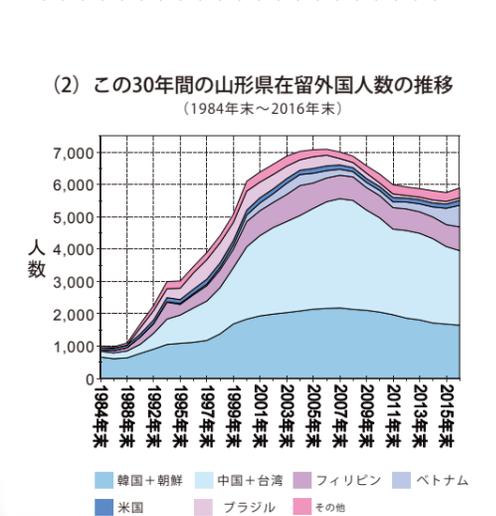
みなさんは自分のまちやむらが「消滅可能性都市」とか「限界集落」に該当しているかどうかというニュースを聞いたことがあるかと思います。山形県でもごく一部をのぞき、これから数十年で人口は半減すると予測されています。もちろん自治体はそれぞれに対策を立てて減少カーブを抑えようと対策をとっていますが、行政にしても企業にしても人口減を勘定に入れて今後の計画を立てざるをえない時代です(グラフ(1)は山形県が立てた「人口展望」です)。そこで人口増加策の切り札として他の先進国と同様に日本も本格的な移民導入策をとるべきだという声も出てきていますが、諸外国での難民、移民による政治的・社会的問題を負の先例として、政府としては従来どおりの技能実習生や高度人材といった分野や業種を限った導入策に留めようとしているのが現状です。

とはいえ山形大学にいられた皆さんのなかには、すでに同級生やご本人の親が外国から来た人だったという方が珍しくないでしょう。特に関西は在日コリアン、関東や東海地方などは日系ブラジル人の人々が多いところですから。それに山形自身も昭和の末期、1980年代後半から国際結婚による女性の移住が増えた地域として全国的に有名になったところ(グラフ(2)からその急激な変化が読み取れると思います)。さらに遡れば、かつての日本は大英帝国やフランスなどと同様の植民地帝国「大日本帝国」として台湾や朝鮮などを領有していたため、英仏と同様、多くの植民地出身者とともに戦後を生きてきた歴史があります。

現在の日本で外国人の問題というと特に在日コリアンについては、言語や文化、宗教の問題よりも北朝鮮の核開発やミサイル、拉致といった二国間関係を反映させてとらえる傾向があります。実のところ日本政府は日本に北朝鮮の国民はいないという立場をとっているのですが、そうした捉え方には過去の植民地支配をどうとらえるかという歴史認識も反映されているように私は見えています。

私は在日外国人に対する政策について、主に歴史的な側面と地域社会の両面から研究しています。これからを知るためにはこれまでを知る必要があるという思いから、たゞいまは戦前から戦後にかけて植民地から帝国本国である日本本土に移住してきた人々への政策を調べています。戦前には現代の「多文化共生」に一見似た「協和」という施策があり、また戦後には植民地支配の「反省」を語る保守系の評論家などもありました。現代では当たり前のようになっているものが過去はどんなものだったのか、なぜそうなったのかを知ろうとしています。

地域公共政策コース
教授 松本 邦彦



上)ヘイトスピーチ問題と歴史認識との関係に注目しました。左下)資料として、また授業の教材としてもドキュメンタリー映画や番組は重要です。右下)日本占領期の政策についての翻訳書です。



未来の自分のために、 幅広い知識を学ぶ

人文社会科学科長 高橋 和

今年度から、人文学部は人文社会科学部になりました。4月から何が変わったのですかとよく尋ねられます。人間文化学科と法経政策学科という二学科体制は、今年度から人文社会科学部人文社会科学科という一学科体制になりました。人文社会科学部という名称変更によって、社会科学系の学問も含まれるということが明示的になり、人文科学系の学科と社会科学系の学科が一つになったことで、人文科学系と社会科学系の垣根は低くなりました。

学部・学科の名称の変更は、現在の社会情勢の変化に対応できる人材を育てたいという大学の期待が込められています。現代社会の抱える問題、たとえば難民について理解しようとする、難民が置かれている状況だけでなく、難民が生み出される背景(歴史学、政治学、経済学)やどのように対処するかという法制度(国際法)のみならず、難民という立場に置かれたことによ

る心理的なダメージや将来への不安(心理学)、家族の離散(社会学)など人文系、社会系にまたがる幅広い分野の知識に基づく、洞察が必要となります。このように現代社会の課題は、多方向から考える必要があるからです。

大学の教育の目的は、知識の獲得から応用できる技能へと移ってきています。しかし、今すぐ使える知識や技術は、急速に進化する社会においてはすぐに役立たなくなります。無駄に思えてもいろいろな知識を吸収しておくことが十年先、二十年先に様々な形で役に立つでしょう。大学での勉強は、大学の4年間で卒業後すぐの就職のためではなく、長い人生を支えるためのエネルギーを蓄えるためと考えると、学問分野を横断的に学べる機会を利用してできるだけ多くの知識と経験を身につけてほしいと願っています。

コース代表インタビュー

アジア史・ヨーロッパ史などが領域の《歴史学プログラム》、認知科学・情報科学などが領域の《認知情報科学プログラム》、日本文学・日本語学などが領域の《日本学プログラム》、芸術文化・表象文化・哲学などが領域の《文化解釈学プログラム》に分かれて専門教育科目を編成しています。他のコースとも同様に、社会人としての基礎的な力を学ぶためのジェネリックスキル科目や実践科目なども、カリキュラムに盛り込まれています。実践科目の中には、文化人類学のフィールドワークを体験し異文化理解の能力を養う課題演習や、美術館・博物館を実地に見学し地域における文化活動の意義と課題を探る課題演習などがあります。また、国語や社会(地歴公民)の中高教員免許状を目指す人や日本語教育に関心のある人のためには、副専攻プログラムを設けてきめ細かな指導を行っています。これらのカリキュラムを通して、人文科学の知識を社会的に活用できる人材を育てていくことを目指しています。

の理解に関する教育では、1年次の「グローバル・スタディーズ基礎講義」でグローバル・スタディーズの多種多様な分野を概観し、2年次の「グローバル・プロブレマティク基礎演習」で多文化主義や難民問題、外交など国際社会・文化の具体的なテーマを掲げ、クラス討議を通じた解決策の作成を実践し、調査・分析・発表の手法を学びます。これを核にして、広範な専門分野を学び、グローバル化社会の諸問題に柔軟に対応する知識・能力を身につけます。また、③協定校留学や海外研修では、事前に行われる「留学事前演習」や指導により自己表現力や積極的姿勢を涵養し、現地では異文化社会での勉学や現地大学生との共同調査などを通して、異なる背景を持つ世界の人々とのやりとりを実践します。本コースは1学年の定員が45名とコンパクトな規模ですが、そのぶん一体感があり、相互に刺激し合い励まし合える学修環境が整っています。



総合法律コース

コーエンズ 久美子

「社会」があるところには、「法(ルール)」があります。ということは、皆さんは日常生活の中で、法の存在を実感している…?とは言えないかもしれません。たとえば、コンビニでアルバイトをしていて、お客さんが買ひ物の代金を支払えばそこで済みですが、支払いをしなかったときに「法」が顔を出して来ます。つまり、普段はひっそりと影を潜めているけれども、いざというときに問題を解決するためのルールを私たち、社会は必要としているのです。そしてこうしたルールは、価値観、考え方が異なる人々がともに生きていくために、「公正」であることが要求されます。



地域公共 政策コース

下平 裕之

地域公共政策コースは、地域社会やコミュニティが抱えるさまざまな課題を適切に捉え、実践的な活動を通じてその解決に取り組む人材を育成することを目標としています。より具体的に言えば、行政・企業・住民の枠を超えて活躍できる知識・能力を身につけた地方創生の担い手となる人材づくりを目指しています。このために、地域社会やコミュニティが抱える様々な課題を把握・分析してその解決に取り組むための知識と技能を実践的に学ぶため、以下のような特色あるカリキュラムを用意しています。

・公共政策・地域政策に関する充実した科目群に加えて、経済学・経営学・法学などのコース横断的教育を受けることがで



経済・マネジメント コース

岩田 浩太郎

「人間が主役の社会づくり」。この言葉は本コースの教育研究の指針です。経済学や経営学というと、数式を使い利潤を生み出すための生産や販売の方法について学ぶイメージがあります。

しかし、過労死のように企業の利益のために働く人間が不幸になる現状は、経済はなんのためにあるのかという問いを私たちに突きつけています。世界的規模での貧富の拡大、原発と環境汚染、地域の過疎化と衰退といった問題はどのように解決できるのか、一人一人が幸せと思える社会はどのような世の中の仕組みのもとで実現できるのか、こうした普遍的な課題を考えることは社会のなかで

総合法律コースでは、さまざまな分野の法律を学ぶことを通じて、社会の問題の本質を理解し、解決方法のあり方、結論に至る論拠を考える、といった理論的な思考方法を習得します。いろいろな意味で大きく変容している現代社会の諸問題について、私たち教員は皆さんに問いを投げかけ、皆さんの価値観に揺さぶりをかけて行きます。「公正なルールってナンだろう」と、問題状況について想像力を駆使しながら、一緒に議論してください。

また皆さんの「想像力」を高めるための授業として、「法務実践演習」という科目を新たに開講することになりました。まだ準備段階ではありますが、一部トライアルを実施しています。「商社マン」になって、上山市の部品製造メーカーに出張したり、「弁護士」になって、大切なベットの交通事故で失った被害者の法律相談を受けたりしてみませんか?

き、これにより地方創生・地域課題解決を考えるために必要な知識を得ることができます。

・地域社会を空間・コミュニティという視野から考えるための地理学、社会学も同時に学ぶことにより、地域社会の課題を個別に取り上げ、調査・分析・政策提言という一連のプロセスをデザインできるようになります。
・自治体やNPO等と協力した実践的な演習科目により、地域の活性化と持続的発展を可能にするための多面的な取り組みを考え実行できるようになります。

本コースの想定される主な進路は公務員となりますが、NPOや観光業、不動産業など地域に関わるさまざまな分野に進むための力を身につけることができます。地域社会のさまざまな課題・問題に関心のある方におすすめのコースです。

の大学の大きな役割の一つです。

本コースのカリキュラムは、経済学や経営学の様々な科目が揃っているとともに、法律学や政治学など関連する社会科学の諸分野も幅広く学べる内容になっています。また、地域経済や企業活動の実際を現場で学べる実践科目も開設し、学生さんが体験から刺激を受けていろいろな問題を主体的に考えていくことを大切にしています。4年次には自分で選んだテーマを調査研究した成果を卒業論文にまとめ、事実に基づいて経済社会の動きを理論的に解明する社会科学の方法を身につけます。

是非、本コースのカリキュラムを活かして、刻々と変化する経済社会に対して大きな視点から課題解決を考える思考方法を学び、将来社会人となる基礎を培っていただきたいと期待しています。



人間文化コース

渡辺 文生

人間文化コースは、人文科学の確かな素養をもとに、地域の文化資源を深く理解し的確に発信できる人材を養成することを目標にしています。1年次では、「日本歴史文化論」などコースの多様な分野の視点から日本を論ずる日本学入門科目と、コースの専門分野について俯瞰的な知識を得るための「人間文化入門総合講義」が必修になっています。2年次以降は、5つの主専攻プログラム(文化人類学・環境動態論などが領域の《文化人類学プログラム》、日本史・



グローバル・ スタディーズコース

富澤 直人

グローバル・スタディーズコースは、高度な外国語能力と、国際社会に関する人文科学・社会科学の幅広い教養に基づいて、地域社会のグローバル化に対応できる人材を養成します。本コースの専門教育は3つの柱(外国語、国際社会・国際文化の理解、留学・海外研修)から成り、①外国語教育は、英語・中国語・ドイツ語・フランス語・ロシア語の強化クラスによりグローバル人材として活躍するための実践コミュニケーション力を磨きます。②国際社会・国際文化

新任教員インタビュー

今年度人文社会科学部に着任した4名の教員に、人文社会科学部のことや山形のことなどいろいろ聞いてみました！

専門分野について教えてください。

松本 Anthropology(人類学)が専門です。生物人類学、文化人類学、考古学、言語学の四分野から、「人類とは何か」という壮大なテーマに挑む学問です。とくに考古学的アプローチに興味を持ち、これまで南米・アンデス地域(主に海岸地域)の先史時代を対象に研究活動を行ってきました。



人間文化コース 准教授
まつもと 剛
(人類学)

竹内 家族社会学、計量社会学です。社会調査データの分析を通じて、両立支援やワークライフバランス政策に繋がる研究をしています。具体的には、女性の就業行動や夫婦間の家事分担、性別役割意識について、これらの実態とメカニズムを明らかにすることに取り組んできました。現在は、ケア(出産・育児と介護)を担う人に生じる賃金の低下の実態とメカニズムについて研究しています。



地域公共政策コース 講師
たけうち まき
竹内麻貴
(家族社会学、計量社会学)

ると言葉と暴力によって心身ともに支配され、抜け出すことは容易ではありません。なぜ人は人を売めるのか。どうしたらこのような犯罪を無くすることができるのか。犯罪を取り締まる国家だけではなく、EUやASEANといった地域機構、国連といった国際機構、さらに市民の連携にその解決の糸口を探っています。

諸田 20世紀前半の中国の貨幣・金融史です。清朝末期から日中戦争期までの中国でどのような貨幣が流通していたのか、それをどのような金融機関が発行していたのか、またそれは当時の如何なる経済環境に規定されていたのか、などを研究しています。

山形・東北の印象は？

松本 実は特別研究員としてすでに一年半を山形で過ごしました。雪国に暮らすのは初めてのことなので、最初は冬の寒さに苦労しましたが、今では山々に囲まれた自然豊かな山形が大好きです。

竹内 レジと車の運転が丁寧。また、インターネット上の情報は少ないけれどよい飲食店をチラホラ見つけたので、発掘

しがいがありそうです。

中村 山形は、視界に大きく入ってくる山々がいろいろな表情を見せてくれるとてもきれいな所だという印象です。そして、何と言っても食べ物が美味しい。自然と食べ物が堪能できる、人にとってとても贅沢な場所です。

諸田 街を歩いていると、人通りが東京ほど多くなく、一人一人の空間が非常に広く、ゆったりとしている印象を受けました。夜は非常に暗くて足元が怖いこと、車の態度が悪い(こちらが横断歩道を渡っていても止まってくれないことが多い)ことを除けば、非常に住みよい地域であると思います。

学生にメッセージをお願いします。

松本 多くの人々にとって、生まれ育った社会や集団における考え方が世界の全てです。私たちは様々なメディアを通じて、この世界には自分たちとは異なる考え方や世界観を持つ人々が存在することを知っていますが、そういった他者の視点に立って物事を考えるというのは難しいものです。それどころか、自分たちの考え方を

を基準に、他者について偏狭で独善的な評価を下してしまいがちです。人類学ではそうした評価の一切を棚上げし、世界が多様であることを認め、自己を相対化します。それは、考え方や世界観の違いが生み出す境界線を乗り越えて、自分が慣れ親しんだものとは異なる他者の視点を得ようとする試みです。「あ、面白そう」と思っ

た学生の皆さん、人間や文化について一緒に考えてみませんか。

竹内 最初の授業をして、「山形大学の学生は授業に真面目に取り組むなあ」と驚きました。ただみなさんには、4年間で頭に知識を入れるだけではなく、質問や疑問点をうまく探せる力を養って欲しいです。社会に出てからも、良い質問をする人は周りに一目置かれると思いますよ。

中村 とにかくたくさんの人々と出会って下さい。それはもちろん国籍を超えて。出会う人の分だけ世界が広がり、今まで当然だと思っていた価値観も変化するでしょう。これまで見えてこなかった社会の問題も見えてくるかもしれません。ものの見方が変化したり広がったりすると、新しい自分に出会うことができます。それは人生を豊かなものにしてくれます。私もそのお手伝いできればと思っています。

諸田 山形は、東京と比べると無益な誘惑が少なく、自分の本当に好きなことを見つけて打ち込める環境だと思います。是非、学問や部活動・サークル、その他の活動を通して、自分の人生の目標を見つけてそれに向けて邁進してください。

新天地で挑戦してみたいことは？

松本 蔵王スキー場が近いのでスノーボード、そして蕎麦打ちに挑戦してみたいです。

竹内 ロードバイク、さくらんぼ狩り、車の運転(ペーパードライバーなので…)、

県内の温泉めぐり

中村 山形の美味しいお店を積極的に開拓していきたいです。同時にウォーキングも始めて、周りの景色を楽しみたいです。

諸田 まず、新しい学問的なネットワークを開拓していきたいです。その他の地域的な活動にも関わってきたいです。また、東京ではあまり必要性を感じなかったのですが、車の運転をできるようにになりたいですね。

出身地と自己アピールなど、もう一言お聞きしました。

松本 東京生まれの東京育ちです。

竹内 10月より地域公共政策コースに着任いたしました、竹内麻貴です。よろしくお願ひします。岡山出身で、大学進学後はずっと京都にいました。昨年9月に大学院生活を終え、4月に専門研究員の職に就いた時は、秋には山形で教員になるとは想像していませんでした。ただ、山形は岡

山と同じで果物が豊富なので親近感があります。特にマスカットに関しては、岡山産と食べ比べるのが楽しみです。

中村 仙台生まれの仙台育ちです。頑張りますので、どうかよろしくお願ひいたします。

諸田 初めまして、諸田博昭と申しま

す。東京都の世田谷区というところの出身で、1年間の中国留学を除けば、ずっとそこに住んでおりました。山形は初めてで、教育や種々の事務仕事の経験もまだまだこれからといったところですが、皆様の暖かいご支援が得られれば幸いに存じます。これから、どうぞ宜しくお願い致します。

異文化間コミュニケーション I 帰国報告

8/26
仙台空港発

9/17
仙台空港着

2017年8月26日～9月17日まで台湾で異文化間コミュニケーション実習 I を実施しました。今回は20名の学生が受講し、協定校である国立台湾師範大学の協力を得て、3週間の中国語研修のほか、より実践的・主体的に学生や市民と交流し、台湾を深く知るための現地調査を実施しました。この実習は、ふすま同窓会及び人文社会科学部後援会からの補助を受けて実施されました。

Taiwan

異文化間コミュニケーション I (台湾)参加者

- | | |
|-------|-------|
| 青木 瑠美 | 宮崎 涼 |
| 石川 穂南 | 石田宏次郎 |
| 菊地 智美 | 仲村ゆうな |
| 佐々木敦美 | 澤井 真由 |
| 菅野結未果 | 森谷 美雲 |
| 田中 瑛華 | 新沼 冴那 |
| 森山 碧衣 | 野村 紗彩 |
| 松浦優里香 | 大友 華子 |
| 石田 詩歩 | 佐藤 里紅 |
| 佐藤 生実 | 鈴木 那菜 |

休日、猫空でゴンドラに乗ってみた



8月28日、学生交流会。台湾人学生たちと初交流



8月31日、文化授業で中国結びを体験



8月30日、校外授業。九份で伝統的な台湾を味わう



9月4日、文化授業で太極拳を学ぶ



休日、士林夜市で台湾料理を堪能



9月7日～12日、街頭調査。ファッション街で一般市民の声を聞く



9月7日～12日、キャンパス内で台湾人学生に意見を聞く。



語学センターで中国語を楽しく勉強する



9月15日、修了証書。3週間の中国語勉強、よく頑張りました。



9月6日、街頭調査に協力してくれる台湾史・台湾文学専攻の師範大生と初対面。クイズゲームが楽しかった。



9月14日、現地の中間発表会で街頭調査の内容と感想を報告し、反省点を振り返る。



台湾師範大学の皆さま、3週間、大変お世話になりました。今度は山形で会いましょう！



9月29日、帰国報告会で3週間の勉強成果を発表



9月14日、師範大生との懇親会。5日間の街頭調査で大変お世話になりました！どうもありがとう！

イースタン・リーグ公式戦の集客アップに貢献！ 企業課題解決型実践演習

人文社会科学部では、本年度より「企業課題解決型実践演習 a(楽天)」という科目が新設されました。本演習では、企業が抱える課題やその解決策を、学生が主体的に検討し提案することで、学生がビジネスへの理解・関心を深めることを目的としています。また、専門知識がどのように役立ち、自分にどのような知識が足りないかを知ることも目的です。

具体的には、山形県内において楽天イーグルスが対戦するイースタン・リーグ公式戦の観客数を増加させることを課題とし、楽天野球団職員によるプロ野球経営等のレクチャー、楽天野球団職員を交えたグループワーク、試合の運営体験などをもとにして、主体的に解決策を提案し、実践する力を育成します。

本年度対象とした試合は、9月10日に天童市で開催された楽天イーグルス対日本ハムファイターズのイースタン・リーグ公式戦です。これに向けて、学生は、チケット担当、試合当日のイベントの企画、広報・宣伝などの「部署」に分かれ、楽天野球団や天童市からご協力をいただきながら活動してきました。

試合当日、学生は会場運営のほか、自らが企画に参画したイベントの実施に携わりました。学生が企画に参画したイベントは主に子供連れの観客をターゲットとしたもので、以下のような内容です。

- 楽天縁日(縁日をイメージしたイベント)
- ウェルカムハイタッチ(開場時に選手とハイタッチ)
- 選手サイン会
- スターティングキッズ(小学校6年生以下を対象に守備位置につく選手と握手)
- オープンフィールド(試合後にグラウンドを開放し、キャッチボールやTバッティングができる)

例年、天童市で開催される試合の観客数は約500人ですが、今年は約1,200人となり、前年の2倍を超えました。学生が企画に参画したイベントや営業、広報・宣伝活動に一定の効果があったと考えられます。本演習は、学生、企業、教員が一体となって進める新しい形式の演習で、今年度の経験はその第一歩となるものです。来年度以降、修正・発展させながら本演習を継続していきます。



地域とともに

人文社会科学部では、学生だけでなく地域の皆様にもご参加いただける公開講座・学術講演会を実施するとともに、地方自治体や海外大学・研究機関とさまざまな交流をしています。

今年度の公開講座

◇前期公開講座(人間文化コース)

都市と社会—歴史・景観・表象

人間文化コース 教授 石澤靖典 准教授 山本 陸

前期の公開講座は「都市と社会—歴史・景観・表象」というテーマのもと、6月5日から22日までに5回の講座として開講されました。洋の東西を問わず古くから人間は、「都市」を単位として社会を形づくり、さまざまな文化を生み出してきました。講座では都市のもつ機能や構造、多様性について、歴史学、人類学、美術史学といった様々な分野からアプローチしました。



▶松尾 剛次 教授「中世都市鎌倉への旅—タイムマシン松尾号に乗って」(6月5日)

【内容】文献資料に発掘の成果を組み込むことで、日本の中世を代表する都市鎌倉について、その都市景観や歴史、あるいは都市全体の特性について検討しました。

【感想】中世都市鎌倉の歴史的事実と仏教都市としてどう発展していったかについて学ぶことができました。都市の周辺部には刑場などの忌み嫌われているものが配置され、それを目立たなくするために極楽寺などの寺が配置されたことなどが受講していて特に興味深く思いました。

▶新宮 学 教授「隋唐の長安から北宋の開封へ—東アジアにおける「都城」の変容」(6月12日)

【内容】〈市制〉と〈坊制〉を手がかりにして中国の都城の特質とその歴史の変遷を解説し、現在ではあたりまえのことと思われるようになった都市に暮らすことについて考えました。

【感想】開封が黄河大氾濫で埋没し、8mほど地下にあることを知り、日本ではあまり起こらない大洪水の規模の違いに気づきました。すっきり、黄河も揚子江も氾濫の歴史をすっかり忘れていました。

▶元木 幸一 山形大学名誉教授「ヨーロッパ中世都市に生きる芸術—ヒトラーが愛した町ニュルンベルクを例として」(6月15日)

【内容】15、16世紀のニュルンベルクの町で、絵画や彫刻が社会の願望を満たすべく制作され、都市の理念を表明してきた経緯について、さまざまな作品を通して検討しました。

【感想】「ベスト対策など市井の人という視点から街やその歴史を知ることが大変興味深く、面白かったです」「ニュルンベルクという町がとても美しい街であったということ、また、宗教色の濃い町だったということ、85%も破壊されながら昔どおりに復原した力に驚いた」

▶坂井 正人 教授「インカ帝国とチム—王国—古代アンデス文明の都市景観と社会」(6月19日)

【内容】アンデスに栄えたインカ帝国やチム—王国の都市について紹介し、王家に関する神話や儀礼が体系的に組み込まれた都市景観と王国の運営について考えました。

【感想】「都市」の景観を読むことで当時の社会秩序や世界観をかなり把握できると注目した点が面白かった」「インカ帝国は多くの人が知っているが、それよりも早く、長く栄えたチム—王国について知ることができ、大変興味深く受講することができました」

▶中村 篤志 准教授「モンゴル遊牧民と都市—カラコルムからウランバートルへ」(6月22日)

【内容】モンゴルの遊牧民が高原に建設してきた都市の特徴とその中で生きる人々の暮らしについて、匈奴の時代から現代にいたる歴史の中で紹介し、遊牧民にとっての都市の意味について探りました。

【感想】都市・首都に対する見方が色々あること、つまり機能や人を集中させ、権力を示すためのものとは限らないというのは新鮮だった。中国史や鎌倉時代に「付随して」ではなく、モンゴルそのもののお話「聞けたのは、大変興味深かった」。

◇後期公開講座(経済・マネジメントコース)

自由貿易と海外進出—法律・経済・経営の視点から—

経済・マネジメントコース 准教授 杉野 誠

ヒト・モノ・カネ(労働・財・資金)は、近年のグローバル経済が進む以前から国境を越えて経済活動を支えてきました。近年は、グローバル化の進展に伴い、さらにその流動性が高まっています。そこで本講座では、「自由貿易」という広いテーマを設定し、法学、経済学、経営学の視点からアプローチしました。



▶亀井 慶太 講師「なぜ地域貿易協定なのか?—余剰分析からの視点—」(9月21日)

【内容】本講義では、世界全体で急速に増大した地域貿易協定が、世界全体の貿易自由化と比較したとき、果たして望ましいことなのかを考えました。

【感想】貿易を通して、日本だけではなく世界の国々が、よりよい生活ができるようになるにはどうしたらよいかを学んでいきたいです。

▶吉原 元子 准教授「中小企業における海外展開戦略の新段階」(9月28日)

【内容】本講義では、中小企業が海外展開をどのように経営に取り入れるかとその課題について考えました。

【感想】サービス産業の海外展開や自治体が提供する施設について興味深かったです。

▶川瀬 剛志 教授(上智大学法学部)「経済グローバル化の国際ルール—WTOからTPPへ」(10月5日)

【内容】本講義では、WTOやTPP等の国際ルールを概観し、現在のグローバル経済を形作る制度枠組みについて考えました。

【感想】TPPIは単なる関税だけのことで浅い認識でしたが、「全30章」の構成を知り、TPPへの関心が高まりました。

▶溜川 健一 准教授「自由貿易はGDPにどのような影響を与えるか?—マクロ経済学の視点から考える—」(10月12日)

【内容】本講義では、一国経済を対象とした経済学であるマクロ経済学を基礎として、自由貿易化が一国経済にどのような影響をもたらすかを考えました。

【感想】GDPの概念の説明などくわしく説明してくださり、たいへんためになりました。

▶杉野 誠 准教授「地球温暖化対策と自由貿易—産業保護政策になっているのか?—」(10月19日)

【内容】本講義では、自由貿易とは関係が無いように思われがちな気候変動政策に隠された産業保護の影響について考えました。

【感想】国境調整措置の内容が産業に対してどのような影響があるのかに興味を持ちました。

ナスカだより

山形大学人文社会科学部附属ナスカ研究所の最新情報をお知らせします。

ナスカでの発掘

ナスカの地上絵を作った人々はどこでどのように暮らしていたのだろうか?素朴にさえ感じられるこんな疑問こそが実は重要であり、ナスカ文化を解明するカギとなる。当時の人々の生活の実態を知ることなしに彼らの残した痕跡を理解することはできないからだ。こんな考えで現在ナスカ研究所では地上絵が分布するナスカ台地周辺の遺跡で発掘調査を行っている。調査の対象となるのは住居、つまりは家である。

なぜか岩山の斜面に作られている廃墟のような部屋の連りの中に慎重に発掘区を設定する。丁寧に掘っていくと、石で作られた部屋の中に火を燃やした跡がある。その灰の中からは食べ物を調理した後の焦げが付いた容器のかけらがでてくる。なぜか動物のフンと一緒に出てくる。動物のフンが火をつける際に使われる場合があるということふと思出す。今度は別の場所からピーナッツの殻、トウモロコシの穂などが現れた。この廃墟のような空間で2000年近く昔に人々が暮らしていたことが実感される瞬間だ。

普通の人々が暮らしていた家であるから、建築としては神殿や地上絵のように人目を惹くものではない。調査の中で現れるものも使い古して壊れた土器、石器、糸よりの道具、食べ残しなど日常的なものばかりである。しかし、だからこそそこには人々の生活を理解す



人間文化コース 准教授 松本雄一

るカギが存在するのだ。今後の分析を通じてどんなふうに関係が構成されていたのかが明らかになってゆくだろう。良いものを食べていた特権的な人がいたかもしれないし、何かを作る職人のような人は特定の場所に住んでいたのかもしれない。一見価値のなさそうなものから過去に光を当てるといっても考古学の一つの醍醐味なのである。



ナスカでの発掘風景

留学生の活動レポート

人間文化学科 言語コース 4年 菊地 春香さん



リトアニアに留学して一番変わったことは、留学そのものに対する印象です。留学する前は、明確な目的なく留学はすべきではないと思っていて、私なりの目的を持って留学しました。ですが、留学に行ってみ

ると、今まで苦手だったものを好きになり、また日本について自分がどれだけ無知であり、海外の人が関心を持ってくれるのかを知りました。クレイジーだけど皆に話したくなる友人や思い出ができて、前より自分に自信が持てるようになったりと、当初の目的以上に充実した特別な時間になりました。留学当初は環境の変化に戸惑うこともありましたが、その時に「自分にとって心地よい領域の外に出た時に成長できる」と声をかけてくれた友人がいました。留学すると、まさにそのような環境に自分を置くことができます。想像以上の経験が絶対できると思うので、留学したいという気持ちがある人はぜひ挑戦してもらいたいと思っています!

法経政策学科 公共政策コース 4年 奥山 詩帆さん



私は、2016年9月から10ヶ月間スペインのサラマンカ大学に留学していました。サラマンカ大学は世界遺産に登録されている「サラマンカの旧市街」にキャンパスを持ち、スペイン最古の大学と言われ、世界

各地から留学生が集まる素晴らしい大学です。留学中は基本的に月～木曜日に講義があり、週末は予復習や課題をこなしたり、友達とピクニックや飲みに出かけたりしていました。講義では学生に意見を聞くことが多かったり、2週間に1回の頻度で課題提出があったりと、積極的な学習が求められました。渡航後すぐはスペイン語がなかなか聞き取れず、何をすることも苦労して、つらくなった時期もありましたが、留学中の10ヶ月は人生で1番勉強した期間であり、日本にいたら経験できなかったことだらけの期間でもありました。

この留学経験を糧に、残りの大学生活も頑張りたいと思います。

合同ゼミ合宿を開催

日本近代文学研究室の 合同ゼミ合宿を開催しました

人間文化コース 准教授 森岡 卓司

去る9月16日、17日の両日、山形大学蔵王山寮を会場として、日本近代文学を研究する学部生・大学院生による合同ゼミ合宿を開催しました。

この合宿は、もともとは2010年度に山形大学人文学部の夏季研修としてはじまったものですが、その後、多くの他大学からの参加を得て規模を拡大しながら継続し、現在では「東北インカレゼミ」という通称も定着、毎夏の一イベントとして学生たちに親しまれています。今年は、山形大学をはじめ、弘前大学、盛岡大学、東北大学、福島大学という東北地区の大学・大学院に加え、立教大学大学院、一橋大学大学院からの参加がありました。また、卒業後、教員などの職を得て地域で活躍するOB・OGたちの参加もあるのが、このゼミ合宿のひとつの特徴です。

研究課題の設定や司会、指定討論者などの役割担当など、研究に直接関係する事項はもちろん、行程計画や各機関・業者との折衝に至るまで、合宿の運営のほとんどの部分を学生が担うことになっていますが、幹事校である山形大学学生の活躍ぶりには目覚ましいものがありました。今年度の新たな試みとして、ポスター発表の企画を立ち上げ、夕食後の時間にまで食い込む充実したゼミ活動の場を提供したことは、参加した教員からも好評をもって迎えられました。

「童話」をテーマとした特集発表をはじめ、今後の発展に期待できるハイレベルな議論もあり、互いに与え合った刺激は、所属先に戻ってからの勉学にも大きな励みを与えてくれたことでしょう。各自がこれまで積み重ねてきたことを通じて交流を深めた参加者たちの成果は、そのうち、別の学会や研究会などの場で見ることができるかも知れません。



山形大学蔵王山寮での合同ゼミの様子

民法改正について 学ぶ

総合法律コース 准教授 小笠原 奈菜

11月2日(木)、3日(金)に山形大学、岩手県立大学、福島大学の三大学で合同ゼミを岩手県盛岡市で行いました。テーマは「民法改正」です。山形大学は「消滅時効」「解除(危険負担)」について、福島大学は「保証契約」、岩手県立大学は「定型約款」について報告しました。

合同ゼミに向け、各グループで事前に資料収集をし、報告資料を作成し、話し合いを重ね当日の準備をしました。明治時代から一度も改正がされていない経緯もあり、今回の改正では大きな変更点が多くありました。なかでも、扱った各テーマは特に重要なものでした。当日はいつものゼミとは異なり、他大学の学生の前で報告をするということもあり、緊張感を持っての発表となりました。民法改正による変更点や、改正による影響なども、教員の助言は最小限に留め、学生たちで考察しました。特に、改正による影響を考える際に、現行民法と改正民法についての内容を理解することが必要であったため、不明点などはグループで話し合い、共有することに力を入れていました。報告終了後の質疑応答の際には、想定していなかった角度からの質問もあり、より深く今回のテーマについて考えることができました。また、他大学の報告を聞き、改正の内容に対する理解が深まりました。報告の手法も様々で、参考になる点が多くありました。

今回の合同ゼミを通じて、各参加者が、民法改正の内容について興味を持ったことはもちろん、民法という法律を学ぶことの面白さを再確認し、今後の勉強に対する意欲が増していました。また、他大学の学生と交流する機会が貴重だったため、刺激を受けていました。このような経験づくりを今後も続けていけるような環境が維持されるよう願っております。



小岩井農場での交流の様子

ホームカミングデー2017

10月21日(土)に「ホームカミングデー2017」を開催しました。

今回で5回目となるホームカミングデーは、第1部「ティーデマン・ふすま賞授賞式並びに受賞者講演会」(人文社会科学部205講義室)、第2部「トークセッション」(人文社会科学部301講義室)、第3部「懇親会」(厚生会館2階)の3部構成で行い、同窓生・学生・教職員等が多数参加しました。

第1部 ティーデマン・ふすま賞 授賞式並びに受賞者講演会

第1部では、ティーデマン・ふすま賞が、ふすま同窓会の野村一芳会長より3人の受賞者に授与されました。

ティーデマン・ふすま賞は人文社会科学部と理学部の学生及び大学院生の優秀公募論文に対して授与されるもので、今回は人文学部人間文化学科卒業生の伊藤大吉さん、高橋綾香さん、大学院理工学研究科博士前期課程修了の橋本侑宜さんが受賞しました。

受賞者講演会では、伊藤さんと橋本さんにより卒業論文、修士論文にもとづく講演がなされ(高橋さんは当日ご欠席)、学生も多数参加し、論文の内容や研究に取り組む姿勢などについて質疑が行われました。



阿部理事のご挨拶



司会の西上副学部長



伊藤さんの講演

第2部 トークセッション—学生生活と現在—

第2部では、パネリストとして元木幸一名誉教授、國方敬司名誉教授に加えて、学生時代に先生方の指導を受けた小松史織氏(平成27年度卒業)と戸田喬之氏(平成19年度卒業)をお招きし、西上勝副学部長の司会のもと「学生生活と現在」のテーマでトークセッションを行いました。卒業生のお二人には学生時代の学びやその後の歩み、先生方には山形大学での教員生活と学生との関わりを中心にお話しいただき、久しぶりにキャンパスを訪れた卒業生や教職員との質疑も交えて、楽しく有意義なイベントとなりました。



國方名誉教授



元木名誉教授



卒業生の小松さん(と元木名誉教授)



卒業生の戸田さん(と國方名誉教授)